

『脂肪の塊』に描かれたプロシア軍人像

——食行動をもとに——

北 川 美 香

はじめに

食の好みの多様性は、単に個人的な嗜好の違いだけで説明しきれものではない。食物摂取行動は社会的・宗教的・経済的影響を受けて形成される¹⁾。つまり、どんな食物を選ぶかで、その人間が持つ諸々の価値観を推量できる可能性もある²⁾。「食べるものを見ればそのひととなりわかる」というブリヤ＝サヴァランの名言はまさにこの点に根拠をおく。文学においても登場人物の性格や社会的地位を浮かび上がらせるのにその食習慣が用いられることがある。フランス文学ではラブレール以来の伝統か、散文作品で具体的な食が語られることは珍しくない。とりわけ近代になって食べ物もしくは食べる行為に関する記述は増えてゆく。風俗の細部にこだわるリアリズムやナチュラリズムにおいて、モノ全般が単に消費されるものでなく、「記号」としての意味を合わせ持つので、食物の重要性も自然と高まるのだろう。例えば、バルザックは時代風俗を描いた一連の小説で、レストランの格や食事内容に作中人物の経済状態を集約して物語る手法を多用している³⁾。モーパッサンの『脂肪の塊』(1880)もこのような流れに沿った例に漏れないことは何度か拙論で取り上げた⁴⁾。

なかでも、著者や想定される読者にとって敵側に属するプロシア軍人の食行動に触れていることは特筆に値する。1880年に発表され、自然主義ののろしを上げることになった中短編集『メダンの夕べ』は『脂肪の塊』を初めすべて普仏戦争を題材とするが、他の収録作品にはフランス兵が飲食を行う場面はあるものの、プロシア兵の食への言及は認められない。人間と人間が殺戮しあう戦争という極限状態を描くのに、敵兵が食欲を満たすなどという悠長なシーン、そんな卑近な描写はさんでは緊張感が維持できないというわけかもしれない。

普仏戦争を扱い、今日まで評価されている小説と言え、他にドーデの『月曜物語』(1871-73)、ゾラの『潰走』(1892)がまず挙げられよう⁵⁾。『月曜物語』では、プロシア軍の食事場面は非常にまれで、フランス軍の貧しい食糧事情と対比させるためだけに存在するといっても過言ではない⁶⁾。一方、モーパッサンの盟友ゾラは、普仏戦争、第二帝政の崩壊、パリ・コミュンまでを大作『潰走』に描き上げた。この作品には、食事に関する記述が頻繁に現れる。といっても、フ

ランス軍の指揮系統が混乱を極め、食糧の補給が満足に行われず、兵士たちが食料不足に苦しむ場面が大半を占める。主人公らがプロシア軍の捕虜となってからも兵士の飢餓状態は執拗なほど繰り返され、祖国が敗戦した惨めさや攻囲され飢えが深刻化したパリの姿と重ね合わせられる。しかしながら敵国軍に目をやると、食に関する記述はほとんど無いに等しい。プロシア軍部に腐った食肉を売りつける業者やフランス軍上層部と豪勢な食事をするプロシア士官が出てくる程度である。プロシア軍人特有の食習慣は描かれない。あくまでも敗走するフランス軍に焦点が合わされ、進駐軍の行動は二の次なのである。

これとは対照的にモーパッサンの場合、『脂肪の塊』に限らず、普仏戦争を取りあげた作品でプロシア軍人は盛んに飲み食いし、特徴的な食行動を展開する。そういった他作品を視野に入れて、モーパッサンが戦時下という緊張状態を表現するのになぜあえて日常的で卑近な因子——敵兵の食行動——にこだわるのかを時代のコンテキストの中で考えてゆきたい。

第1章 ジャガイモと豚に象徴される卑俗な日常性

小説の半ば、プロシア軍が駐留する宿屋の女主人がプロシア軍人に対する不満を爆発させるシーンがある。

Puis elle baissait la voix pour dire les choses délicates, et son mari, de temps en temps, l'interrompait : « Tu ferais mieux de te taire, madame Follenvie. » Mais elle n'en tenait aucun compte, et continuait :

« Oui, madame, ces gens-là, ça ne fait que manger des pommes de terre et du cochon, et puis du cochon et des pommes de terre. Et il ne faut pas croire qu'ils sont propres. — Oh non! — Ils ordurent partout, sauf le respect que je vous dois. » (I, p.101)

彼女は宿屋に宿泊する伯爵夫人を相手に愚痴をこぼしている。最初に前置きされる「一段と声を落とし」たり、「夫に話をやめるよう注意され」たりする発話状況と「ca ne fait que」という誇張表現や「pommes de terre」と「cochon」の語順を変えただけの無意味な反復を含む発話内容から、これは単なる事実の陳述ではなく、中傷であることがわかる。食べ物の選択によってそれを食べる人間の内容が判断されている好例だろう。さらに、女主人はその直後にプロシア兵が不潔なことを嘆き、暗に豚とプロシア兵の相関性、食べられるモノと食べる者のつながりを示唆している。「Oh, non!」という断固とした否定、強意的な場所の副詞「partout」、聞き手である伯爵夫人にこれでも遠慮しているという譲歩表現に、女主人の強い口調が窺える。

ではなぜ豚とジャガイモを食べることが批判の対象になるのか。これらの食物は、歴史上常に低い評価を受けてきたわけではない。豚肉は古代ローマのご馳走に数えられ、中世にはどの階級

にも好まれた。古代から19世紀に至るまで、人類が消費した食肉の最も多くの量を供給している。他方、ジャガイモは現在ではごく平凡な食材として世界中で受け入れられている⁷⁾。乾燥加工製品や冷凍食品として加工食品産業にも大きな貢献を果たしてきた。『脂肪の塊』でモーパッサンが食物に託した意図を明確にするため、まず豚とジャガイモが当時人々に与えていた印象から検証してみよう。

豪遊と大食で知られたアレクサンドル・デュマが食に関する知識と哲学を集大成した『大料理事典』(1872)は、19世紀中葉の料理や味覚を取り巻く美的・栄養学的アスペクトを今日に伝える。そのなかでデュマは豚について随分なコメントを残している。「豚は不浄の動物の王である」というグリモ・ドゥ・ラ・レニエールの言葉を引いて、豚はフランス人に「汚さ」「卑猥さ」のイメージを喚起するとし、人間についてこれを用いると「汚い人間、卑劣漢、大食漢、好色漢」などを指すと述べている⁸⁾。現在に通じる使い方である。『脂肪の塊』でも、進駐してきたプロシア兵に対して沸き上がってくる抑えようのない嫌悪感を娼婦エリザベットが以下のように形容する。

Je les regardais de ma fenêtre, ces gros porcs avec leur casque à pointe, et ma bonne me tenait les mains pour m'empêcher de leur jeter mon mobilier sur le dos. (I, p.96)

兵士が太っている点にも後でまた注目したい。

どうも19世紀フランスで豚が見下されていた理由は不潔さ、異常な食欲、旺盛な繁殖力にあるようだ。第1に、排泄物を食べたり、泥水の中を転げ回ったりするので、不潔と断じられる。先の女主人が豚とプロシア兵士を結びつけて罵倒したのもそのためだろう。しかしそれは豚の悪しき本性でなく他に食べるモノ——根菜や穀物——があればそちらを好むし、転げ回るのは身体を涼しく保つためののだが⁹⁾。

豚の次なる短所、異常な食欲は現在も「豚のようにががつ食べる *« manger comme un porc »*」という表現に窺えるように一般に広くイメージが定着している。豚はそもそも食肉用としてしか役立たない家畜だが、穀物を肉に変える効率の良さは牛や鶏の比ではない。言い換えれば、人間は豚の異常な食欲の恩恵を一方で被りながら、もう一方でその特性を軽蔑している。モーパッサンの作品では、空腹のあまり人間を食い殺す豚まで出現する¹⁰⁾。

最後に、豚が好色と結びつけられるのは一度に多くの仔豚を出産するせいだろうが、受胎期間が短く、多産な点も家畜として極めて効率がよい。ここでも、人間は自分たちに都合の良いことを棚に上げて豚を侮辱する。モーパッサンは豚をタイトルに使った小品『モランの豚野郎』 *Ce cochon de Morin* (1882)を残している。列車に乗り合わせた美女に襲いかかって告訴される羽目に陥ったモランは、友人に *« Tu n'es qu'un cochon »* とののしられ、それ以降名前に *« cochon »* を冠せられる不名誉に甘んじなければならない。

このように益獣である豚が不当に貶められるのは、宗教的・社会的背景によるのだろう。そも所もギリシャ神話では、豚は神々に近い存在であった。いくつか例を挙げてみよう。赤子のゼウ

スに乳をやる栄誉を賜った乳母の中に雌豚もいた。プロテウスはさまざまなものに身をやつしたが、豚にも変身している。豚は豊饒の女神デメテルにとって大切な動物でもあった¹¹⁾。ところが、不浄であるため食べてはならないと『聖書』レビ記第11章が教えたのに加え、イスラム教でもコーランが豚肉摂取を禁じているのは周知の通りである。ヒンドウ文化にも同様の傾向が認められる¹²⁾。

さらに、食物は地位の象徴としての要素を含むので、食に対する社会的な影響も見落とせない。19世紀フランスにおいて、農民は豚肉以外の肉を余り口にする機会がなかった。そのためか、ブルジョワ社会では豚肉の評判が悪く、牛肉の人気はるかに勝っていた¹³⁾。19世紀初頭に活躍したフランス料理の確立者アントナン・カレームは、最晩年に『19世紀フランス料理法』(1832)を執筆し、自らの料理法を集大成した。その中で豚肉の調理法に費やしたページ数は牛肉に比して驚くほど少ない。カレームによれば、豚肉は栄養価に富むが、消化に悪いと考えられていた¹⁴⁾。第2帝政下のパリ・ブルジョワ階層の食事を今日に伝えるブリス男爵のメニューを見ても、ブルジョワは農民に比べて豚肉を食べる回数が極端に少ないことがわかる。18世紀後半から19世紀初頭にかけての食通だったブリヤ＝サヴァランも著書『味覚の生理学』(1825)で豚肉を黙殺している。

ではプロシア兵のもう一つの好物とされるジャガイモはどうだろうか。ジャガイモはヨーロッパに持ち込まれた当初、聖書に何の記載もないこと、種子を蒔かなくとも土の中で次々に増えていくこと、奇妙な瘤塊状をしていることなどから、「悪魔」の食物と考えられた。ジャガイモが嫌われたもう一つの理由は、ナス科に属するせいであった。ナス科には、ヒヨス、ヒヨドリ、ジョウゴ、ペラドンナのような有毒植物が多く、ジャガイモ自体、芽の部分にソラニンを含んでいる¹⁵⁾。最初の頃は皮を剥かずに生で食べられることも多く、その結果として引き起こされる消化不良が伝染病と混同された。18世紀半ば、ブザンソン高等法院はハンセン氏病を起こす危険があるとしてその栽培を禁じたほどである¹⁶⁾。先ほど引用したデュマは、どう見てもジャガイモは粗悪でせいぜい豚の餌向きであり、人が食すなら労働者に適するとみなしている¹⁷⁾。事実、フランスではまず豚の飼料用として使われ、飢えをしのぐため庶民に広まった。ジャガイモは豚肉と並んで19世紀でも労働者と職人の食事と見下されていた¹⁸⁾。

モーパッサンの作品でもジャガイモは貧しさの象徴として機能することが常である。貧弱な食料を分け合う子供たちの食事風景に登場したり、良家出身の女性が駆け落ち先で甘受する耐乏生活の一構成要素となっている¹⁹⁾。さらに、ジャガイモの皮むき仕事は質素な生活の一場面を提示するのに用いられる²⁰⁾。

以上、当時豚とジャガイモから連想されるイメージを振り返ってみた。そこから見えてくるのは、大衆に割り当てられた汚点の数々——不潔、貪食、色欲、貧困——である。ではモーパッサンはプロシア兵の卑俗性をこの食行動から抽出して、敵兵への嫌悪感をフランス人読者に植え付けようとしているのだろうか。そう考えると、合点のいかない節が出てくる。『脂肪の塊』で娼婦に身体を提供させようと、フランス人一行に足止めを食わせる士官が豚やジャガイモを食べるようには描かれていない点である。

第2章 プロシア軍士官と兵卒

プロシア軍人が登場するモーパッサン作品を通読してみると、彼が食行動の点で2種類のプロシア軍人を書き分けているのに気づく。1つは、太っていて食欲旺盛で人柄がよい、豚肉やジャガイモを常食する兵卒だ²¹⁾。例えば『ヴァルター・シュナッフスの冒険』(1883)では、戦線に残されたプロシア兵シュナッフスが、いかにしてフランス軍の捕虜になるかに知恵を絞る。

Depuis son entrée en France avec l'armée d'invasion, Walter Schnaffs se jugeait le plus malheureux des hommes. Il était gros, marchait avec peine, soufflait beaucoup et souffrait affreusement des pieds qu'il avait fort plats et fort gras. Il était en outre pacifique et bienveillant, nullement magnanime ou sanguinaire, père de quatre enfants qu'il adorait et marié avec une jeune femme blonde, dont il regrettait désespérément chaque soir les tendresses, les petits soins et les baisers. Il aimait se lever tard et se coucher tôt, manger lentement de bonnes choses et boire de la bière dans les brasseries. (I, p.793)

国家という公的な物差しで見ればプロシア兵にとってフランス侵攻は喜ぶべきことだろうが、個人的価値基準によればシュナッフスは人間の中で最も不幸な者になる。それが主観的判断でしかない証拠に動詞「se juger」が使われている。この矛盾は、兵士という身分にそぐわない彼の鈍重さ・平和志向に由来する。当初シュナッフスはフランス兵をおそれて溝に隠れているが、そのうち飢え死にする恐怖に駆られて村に出てくる。大きな屋敷の台所から漂ってくる食物のにおいに誘われて侵入し、全ての料理を食べ尽くす。満腹して身動きすらままならず、シュナッフスは腰掛けて目を閉じてしまう。逃亡兵でありながら自分の身の危険を心配するより空腹を満たすことが優先している。しかもシュナッフスに至福をもたらす料理は特別なご馳走などではなく、館の召使いの食べさしに過ぎない。料理の質に対する兵士の要求の低さを物語っている。

次に『母親』(1884)でフランス人老婆の家を占領した若い4人のプロシア兵はやはり太った気のいい青年たちである。

C'étaient quatre gros garçons à la chair blonde, à la barbe blonde, aux yeux bleus, demeurés gras malgré les fatigues qu'ils avaient endurées déjà, et bons enfants, bien qu'en pays conquis. (I, p.1219)

2行目から3行目にかけての「bien que」に始まる譲歩表現から、占領者にありがちな傲慢さを持ち合わせていないのは明白だ。彼らは近くで盗んだウサギを殺してむさぼり食うなど、食欲も旺盛に描かれている。

『聖アントワヌ』(1883)でもフランス人老人アントワヌにあてがわれた占領軍の兵卒は丸々とした人の良さそうな若者だった。

C'était un gros garçon à la chair grasse et blanche, aux yeux bleus, au poil blond, barbu jusqu'aux pommettes, qui semblait idiot, timide et bon enfant. (I, p.773)

一目で彼をお人好しだと見破ったアントワヌ爺さんは兵卒がフランス語を理解しないのにつけ込んで豚呼ばわりし、無理に食べさせようと謀る。プロシア兵はそれを好意と取って食べ続ける。アントワヌが兵士を知り合いの家に次々と連れて行って食べ物を出させる場面を見てみよう。

Le soldat, stupide et doux, mangeait par politesse, enchanté de ces attentions, se rendait malade pour ne pas refuser; et il engraissait vraiment, serré maintenant dans son uniforme, ce qui ravissait Saint-Antoine et lui faisait répéter: « Tu sais, mon cochon, faudra te faire faire une autre cage. » (I, p.775)

ここでは「politesse」「enchanté」といった語句に現れた性格や申し出をむげに断れない姿勢が他人を疑わない兵士の優しさを形づくっている。アントワヌのたくらみに乗せられて、まさに餌を与えられた豚のように若者は肥え太ってゆく²²⁾。

これら3作品からの引用を並べてみると、人物描写に同じ形容詞「gros」「gras」「bon」が繰り返し用いられているのが目に付く。どの兵士も皆色白なもの豚を連想させるためかもしれない²³⁾。おとなしくしている兵卒の例をもう一つ挙げておこう。『捕虜』(1884)で、北フランスを制圧した部隊から幾人かのプロシア兵がはぐれて森番の家にたどり着き、その娘にジャガイモスープを用意してもらう。

Les six hommes suivaient de l'œil tous ses mouvements avec une faim éveillée dans leurs yeux. Ils avaient posé leurs fusils et leurs casques dans un coin, et ils attendaient, sages comme des enfants sur les bancs d'une école. (II, p.411)

武器を横に放り出して警戒を怠り、子供のようにおとなしく待っている姿に、彼らの無防備ぶり・無害さが如実に現れている。この後、兵士たちはジャガイモスープをすさまじい勢いで平らげる。

以上の兵士たちに共通しているのは、占領者でありながらフランス人に対して敵対心を持たないどころか、極めて親切で、その結果被占領者と平和に共同生活を送っていることだ。『母親』に登場するプロシア兵の若者は、占領している家の持主であるフランス人老婆の負担を少しでも減らそうと、1つの家族のようになって働く。

Puis on les [les soldats] voyait nettoyer la cuisine, frotter les carreaux, casser du

bois, éplucher les pommes de terre, laver le linge, accomplir toutes les besognes de la maison, comme quatre bons fils autour de leur mère. (I, p.1219)

ジャガイモの皮むきが下働きの一つに数えられている。『脂肪の塊』でも、ルーアン市民は進駐軍がやってくれば、極悪非道の限りが尽くされ、法も秩序も失われてしまうと恐れていたが、残虐行為を働いたというのはデマだったらしいと判明する。フランス人はプロシア兵の働きぶりを目の当たりにして驚くことになる。その様子は後で詳しく検討する。

これらのおとなしい兵卒が食欲という根元的な生理的欲求を満たすのに汲々としているのは、やはり次はいつ食糧にありつけるか分からない不安に駆られるからではないか。19世紀フランスはレストランの普及や美食文学の流行で食生活が贅沢になったと思われがちだが、それはまだごく限られた階層の人々に享受されていただけだ。大多数の庶民は美食趣味などには縁がなく、日々の糧を得るのに悪戦苦闘していた。ドイツは寒冷な気候のため、ジャガイモが早くから小麦の代用として食卓に上ったので、今日でもジャガイモと言えばドイツ料理の代名詞のように考えてしまう。しかし同時に、ジャガイモはフランス農民の主要な食物でもあった。小麦よりもはるかに収穫率が高く、栄養価にも富むため、貧困階級の栄養水準を引き上げ、19世紀の過剰人口を支える原動力となったのである。豚肉についても同じで、フランスの農家では少しでも余裕があれば豚を飼い、秋に屠殺して塩漬けや薫製にし、冬期の蛋白源にした。つまり、プロシア人の食習慣と描かれているものは、実はフランス下層庶民の食生活に他ならない。

これとは対照的に、モーパッサンが描くプロシア士官は食欲に乏しく、アルコールや贅沢品に興味をそそられることはあっても、豚肉やジャガイモには目もくれない。『フィフィ嬢』（1882）でも、宴会で士官がすすんで手を出すのはコニャック、リキュール、シャンペンのたぐいである。なぜそんなに食べることに貪欲でないのだろうか。

モーパッサンは『29号寝台』（1884）のなかで、理想的な外観を備えたフランス軽騎兵士官を描いている。身体に対する気配りで重要なのは、「腰・胴・口髭」の3点に集約される。胴はコルセットをはめたように細いのがよく、これは男らしく頑丈な胸を強調するためらしい。ここに登場する美男士官は、小柄で太った将校をみっともないとあざ笑い、兵卒は人足にすぎないと唾棄していた。すなわち、士官の兵卒に対する軽蔑の念、スマートな身体への希求が読みとれる。プロシア士官に関しても同様の傾向が見られる。

『脂肪の塊』に出てくる士官はどんな体型に設定されているか。彼が初めて読者の前に姿を現す場面を取り上げてみよう。

A côté du cocher se tenait, en pleine lumière, un officier allemand, un grand jeune homme excessivement mince et blond, serré dans son uniforme comme une fille en son corset, et portant sur le côté sa casquette plate et cirée qui le faisait ressembler au chasseur d'un hôtel anglais. (I, p.98)

『29号寝台』で理想として掲げられた容姿に限りなく近い。しかしながらその肉体は語り手に賞賛されはしない。否定的なニュアンスを持つ副詞 «*excessivement*» を使ったり、女性 «*comme une fille en son corset*»あるいは社会的地位の低い者 «*ressembler au chasseur d'un hôtel anglais*» にたとえる揶揄的表現に語り手の嘲笑するようなまなざしが見て取れる。語り手の評価を伴う語句に彩られ、当事者に自覚されていない滑稽さ・卑小さが読者に示される。こうして戯画化された士官像の裏には、残虐・横柄な性格が隠されている。この将校は自らの権力を笠に着て、欲望を満たそうとはかり、一貫して横柄な態度を崩さない。先ほど挙げた『フィフィ嬢』でも、5人登場するプロシア士官はさまざまな外観を備えている。しかし、その中でもコルセットをはめた女のように腰の細い士官が、兵卒に対しては傲慢残酷、敗者に対しては無慈悲乱暴ともっともサディスティックに描かれる。モーパッサンが、作中人物の身体的特徴と性格造形に相関性を持たせている証拠と言えよう²⁴⁾。

指揮官たちは空腹に煩わされることはない。それよりも、見られる存在として他人の視線を意識するのに追われている。そのため、理想とする体型を維持したり、身だしなみに注意を払う方が重要になっている。満腹して初めて人は外見にこだわられるというわけか。18世紀末にイギリスで発生し、19世紀全般フランスを支配したダンディズムの精神も影響しているだろう。ダンディにとって、肥満は美を殺す最大の恐怖だった²⁵⁾。がつがつ食べる人間は自分の身体と装いというものを忘れているとして軽蔑された。モーパッサンは士官の肉体描写に「コルセット」を頻繁に持ち出す。コルセットは元来女性の下着だったが、1770年以後おしゃれな男性もつけるようになる。コルセット狂は軍人社会から始まったという²⁶⁾。軍人はとりわけ鑑賞される、誇示される身体としての意識が高く、肉体の審美性を追求したからであろう。

『脂肪の塊』のプロシア軍人に見られる2種類の食習慣・体型は何を意味するのだろうか。その対照性を明らかにするために、両者が作中人物の目を通して、読者に提示される箇所を比較してみよう。最初に引用するのはプロシア将校に足止めされたフランス人の貴族とブルジョワが偶然目にした兵卒の姿である。彼らは占領したフランス人農家で働いている。

Le premier qu'ils virent épluchait des pommes de terre. Le second, plus loin, lavait la boutique du coiffeur. Un autre, barbu jusqu'aux yeux, embrassait un mioche qui pleurait et le berçait sur ses genoux pour tâcher de l'apaiser; et les grosses paysannes dont les hommes étaient à « l'armée de la guerre », indiquaient par signes à leurs vainqueurs obéissants le travail qu'il fallait entreprendre : fendre du bois, tremper la soupe, moudre le café; un d'eux même lavait le linge de son hôtesse, une aïeule toute impotente. (I, p.103)

次に、暇を持て余して散策に出かけたフランス人一行の前に士官が現れる箇所を見てみよう。

Tout à coup, au bout de la rue, l'officier parut. Sur la neige qui fermait l'horizon il

profilait sa grande taille de guêpe en uniforme, et marchait, les genoux écartés, de ce mouvement particulier aux militaires qui s'efforcent de ne point maculer leurs bottes soigneusement cirées. (I, p.109)

全能の語り手が登場人物のフランス人らに「内的焦点化」を行うのは、2つのテキストに共通している。

では、文法的な対照性をいくつか指摘してみよう。第1の引用で人称変化動詞の主語はバリエティーに富んでいる。兵士が何人も存在するため、そのうえ「le premier」、「le second」、「un autre」というように各動作主には名前すら与えられない。匿名性・複数性を特徴づける効果を上げ、兵卒の没個性化を促し、戦争で消費される単なる駒としての地位を思い起こさせる。反対に第2の引用では、物ではない生物体の主語は士官だけである。散歩中のフランス人ひいては読者の視線が一人の人物に集中する。統語論から見れば、兵士の描写では相対的に文が単純で短い。修飾語句をそぎ落とされた動詞中心の文がたたみかけるように続く。士官の引用には、前置詞句が繰り返し用いられる。とりわけ第2文は、接続詞 *et* により複文が生まれ、関係詞節も2つを数え、それに状況補語、不定法が連続し、複雑な構造の文に仕上がっている。異なる動作動詞を繰り返すことにより、兵士がきびきびと仕事をこなしていく姿を想像させるのに対し、士官の方は1つの行為にまつわる説明部分が文の大半を占め、気取った動作が無意味な印象を与える。リズムの点では、兵士については「le premier」、「le second」、「un autre」および「fendre」、「tremper」、「moudre」など *rythme ternaire* が多用され、軽やかでリズム感がある。士官の方は最初の一文を除いて、とても歯切れがよいとはいえない。

文法的な対照性が織りなす効果は、意味の面での対比を際立たせるのに一役買っている。どちらの引用にも単純過去形の動詞は1つしか現れない。が、その主語の性格の違いは興味深い。兵士の引用では、この場へやってきた行為者はフランス人の貴族とブルジョワである。兵士らは背景のようにその場に存在しているだけで、物語の筋を展開させる中心的役割を担うことはない。兵士の行為は全て半過去か現在分詞で表される。動作の継続性・反復性が重視されるためだ。すなわち、無限に繰り返されるルーティン・ワークに埋没している様子を強調している。士官の方は急に見る者の前に現れている。まるで舞台上に突然姿を現した俳優のように。彼は先ほど引用したように最初に読者に提示される際にも闇の中から「カンテラの光に照らされて」劇的な登場を果たす。加えて、見渡す限り雪に覆われた大地の上に背の高さがひととき目立つ。雪はモーパーサンにとってプロシア兵による占領を象徴すると言われる²⁷⁾。すなわち、フランスを蹂躪する男の権勢、傲慢さが、水平線に対する垂直性に託されている。一方、兵士の方は限られた場所、それも屋根の低い貧しそうな家に囲い込まれ、太った主婦にこき使われる。兵士らは生活に密着した下働きに励み、命令するのは占領されている農婦の方である。「*vainqueurs obéissants*」という一見矛盾したような表現が彼らの従順さをよく物語っている。占領した土地との同化が具体化されているわけだ。そして、士官が入念に手入れした靴が汚れないように注意を払うのに対し、兵卒は汚れをいとわず働いている。食欲・体型の差異とつながる審美性の有無が読み取れる。

2つの異なった提示方法を見ると、フランス人に観察されている状況設定は共通するのに、プロシア軍人の2類型は全く性格が異なる。士官は「見られる存在」としての自己に過剰なほど意識的で、それが語り手の皮肉な口調を呼び起こしている。それにひきかえ、兵卒らは背景——占領された町——にとけ込み、自己を客観的に見つめる余裕もない姿が浮かび上がってくる。実情をよく知る土地の者が兵卒の生活ぶりを解説する。

[...] ils ont tous laissé une femme et des enfants au pays; ça ne les amuse pas, la guerre, allez! Je suis sûr qu'on pleure bien aussi là-bas après les hommes; et ça fournira une fameuse misère chez eux comme chez nous. Ici, encore, on n'est pas trop malheureux pour le moment, parce qu'ils ne font pas de mal et qu'ils travaillent comme s'ils étaient dans leurs maisons. Voyez-vous, monsieur, entre pauvres gens, faut bien qu'on s'aide... C'est les grands qui font la guerre. (I, pp.103-104) (強調筆者)

« aussi » と « comme » によって « Ici » と « là-bas », すなわち « nous » と « eux » が等価に結びつけられる。敵対しているはずの人間同士が « pauvres gens » という語句でくくりにされ、次の « les grands » と対立させられている。プロシア軍人の2類型が呈する差異に比べれば、占領する兵士と占領される農民の間に横たわる距離は限りなく小さい。

ところで、モーパッサンの普仏戦争に取材した作品では多くの殺人が行われる。プロシア兵卒が殺される場合、それは個人の落ち度や非によるのではなく、無差別に犠牲となる（『ミロン親父』（1883）、『母親』、『聖アントワヌ』）。ところが、プロシア士官が殺害される場合は皆、明確な理由があって殺される。フランスを誹謗中傷したからだ（『フィフィ嬢』、『決闘』（1883））。さらに、何の罪もないフランス人が殺されるのはサディスティックなプロシア士官の命令による（『狂女』（1882）、『二人の友』（1883））。このことから分かるように、モーパッサンが一連の作品で対立させているのはプロシアとフランスではなく、持つ者と持たざる者である。アルマン・ラヌーはモーパッサンの普仏戦争関連作品を愛国的と一括し、作家はプロシア兵の中では逃亡兵にだけ暖かい眼差しを注いでいると断じる²⁸⁾。しかし、本論で見てきたような気のいいプロシア兵卒の扱い方やフランス軍内のサディズムについても『恐怖』（1884）や『王様の日』（1887）で描いていることからそれは不適切な指摘といわざるを得ない。『恐怖』では、敗走中のフランス軍に息子を捜しにきた老婆がフランス兵によってたかって銃殺される事件が回想される。『王様の日』に登場するフランス軍人はブルジョワの空き家に侵入し、破壊・略奪行為を楽しんだ末、女性を招いて宴会を催そうと試みる。まさに『フィフィ嬢』のフランス軍人版である。物語の最後に、フランス軍は、命令に従わなかったかどで耳の不自由な羊飼いを殺してしまう。

普仏戦争で国内の大方の予想に反してフランスがあっけなく敗北した理由の一つに、軍隊の組織力、兵器の性能の差が指摘される²⁹⁾。しかし、モーパッサンはそのような両軍の差異は捨象し、階級対立という点で両者を結びつけている。実際、フランスでは18世紀に貴族が官職あさりに夢中になって高級士官の地位を独占するようになった。兵卒は報酬も希望も乏しいのに何も任務を

知らない貴族のために命を懸けて働かされた。1861年の統計によると、プロイセンでも歩兵騎兵将校の70～90%を貴族や地主が占めており³⁰⁾、将校団の貴族的性格は軍改革にもかかわらず、基本的に揺らぐことなく存続したという³¹⁾。そのような実状を踏まえ、『フィフィ嬢』に登場する士官も侯爵や男爵になっている。

貧しい食事の描写は敵味方の対立を根底から覆す。豚肉やジャガイモを食べるプロシア兵とフランス農民の間には、抑圧された者同士の奇妙な連帯がある。戦争の悲劇は下層の者同士が上層部の意向で殺し合うこと、階級社会の社会構造がそのまま軍隊にも持ち込まれていることをモーパッサンは言いたかったのではないか。『母親』で息子に戦死された母親が自宅を占領していたプロシア兵を皆殺しにする。しかし、彼女はプロシア兵を憎んでいたところか愛していたと記されている。彼らを殺したのも息子と同一視したためではないか。

Et, comprenant sa peine et ses inquiétudes, eux qui avaient des mères là-bas, ils lui rendaient mille petits soins. Elle les aimait bien, d'ailleurs, ses quatre ennemis; car les paysans n'ont guère les haines patriotiques; cela n'appartient qu'aux classes supérieures. Les humbles, ceux qui paient le plus parce qu'ils sont pauvres et que toute charge nouvelle les accable, ceux qu'on tue par masses, qui forment la vraie chair à canon, parce qu'ils sont le nombre, ceux qui souffrent enfin le plus cruellement des atroces misères de la guerre, parce qu'ils sont les plus faibles et les moins résistants, ne comprennent guère ces ardeurs belliqueuses, [...] (I, pp.1219-1220)

« paysans »あるいは« humbles »が« classes supérieures」と対置されているのが分かる。国籍による区別ではなく、あくまでも恵まれない者と恵まれた者の対立に重点が置かれている。これは19世紀を通じてのフランス食文化の一つの特徴——貧富の差——を映しているとも言える。ブルジョワ階級が美食をもてはやす一方で、多数の民衆は日々の食事にも事欠いていた。そんなパリの食状態の縮図とも読めるだろう。

終わりに

モーパッサンは『メダンの夕べ』が目指すのは、愛国主義を排して戦争の真の姿をはっきりさせること、戦争の非神話化だとフロベールに書き送っている³²⁾。評論の中でも戦争は愚かな行為だと何度も糾弾し、戦争を起こすのは政府高官が我欲を満たすためなので、犠牲となる民衆は抗議しなければならないと主張する。フランスに攻められる敵国の人的被害にまで心をくだく³³⁾。1870年に20歳で従軍した体験³⁴⁾が、単なるプロイセンへの憎しみにとどまらず、戦争そのものへの憎悪、作品を通してその実相を暴露しようとする情熱へと駆り立てたのだろう。愛国的な文学作品が次々と発表されていた当時の風潮³⁵⁾に対抗してあえて両軍の対立を消し去った『脂肪

の塊』を世に問うたのは作家の信念がそれだけ固かった証拠といえるのではないか。モーパッサンが後年執筆した「戦争物」ではプロシア士官像がヴァリエーション豊富になり、士官と兵卒の両方が描かれることも珍しく、両者が生み出すコントラストはここまで明確ではない³⁶⁾。モーパッサンの普仏戦争関連作品は、登場人物のプロシア人に対する報復手段やヒロインの果たす機能で分類されるのが常であった³⁷⁾。しかしながら、プロシア軍人の呈する食行動を中心に据えることで、モーパッサンの問題視する階級格差が原形を保ったまま『脂肪の塊』に現れていることがより一層はっきりと見えてくるのである。

註

- * 本稿は、1997年度日本フランス語フランス文学会関西支部大会（1997年11月22日、京都産業大学）での口頭発表の内容に大幅な加筆修正を施したものである。
- * 本論中のモーパッサン短編からの引用はすべて Guy de Maupassant, *Contes et nouvelles I, II*, Louis Forestier éd., Gallimard, bibliothèque de la Pléiade, 1974, 1979 による。

- 1) スティーブン・メネル、『食卓の歴史』、中央公論、1989, p.17.
- 2) ポール・フィールドハウス、『食と栄養の文化人類学』、中央法規出版、1986, p.58.
- 3) 例えば、『従姉ベツ』の中で、「食卓こそ財産の寒暖計」と記され、没落中のユロ男爵家の貧しい食事風景が展開される。また、『幻滅』ではパリで一旗揚げようと田舎から出てきた貧乏青年リュシアンが学生食堂で貧弱な食事に耐えながら、贅を尽くした晩餐会に列席するのを夢見ている。
- 4) 「『脂肪の塊』における食のテーマ——娼婦エリザベツを通して——」、『仏文研究』、27号、1996, pp.163-174, 「『脂肪の塊』におけるアルコールの儀式的機能」、『仏文研究』、28号、pp.71-82, 1997を参照。
- 5) 詩作品に関して言えば、テオドル・ド・バンヴィルの『プロシア風牧歌集』（1871）とユゴーの『恐怖の年』（1872）が代表作に挙げられよう。いずれも韻文作品にしては食物や食べる行為が頻繁に現れる。一つには、やはりネズミや猿を食べるほど食糧事情が深刻化していたパリの状態を描写するためである。もう一つには、「むさぼる」「飲み込む」といった食べる行為を比喻に使うことで戦争の残酷さを表現するためである。両作品ともプロシア兵の食事風景は見受けられない。
- 6) 『少年間諜』で、フランス兵がビスケットとコーヒーで飢えをしのいでいるのに、プロシア兵はスープ、キャベツ、脂肉にシャンペンとワインを加えた食事を楽しむ場面がある。
- 7) ロラン・バルトは、フライドポテトをフランス人にとって «nostalgique et patriote» と評している (Roland Barthes, *Œuvres complètes I*, Seuil, 1993, p.610)。
- 8) 『デュマの大料理事典』、岩波書店、1993, p.316. 戸塚真弓は『パリからのおいしい話』（中央公論、1989, pp.201-205）で現在のフランス語における豚という語を使った罵倒語を列挙し、食べ物としての豚肉が持つ否定的イメージと関係づけている。
- 9) マーヴィン・ハリス、『食と文化の謎』、岩波書店、1988, p.77.
- 10) 『ユダ親父』（1883）の一節。豚を飼う物乞いの家で大きな物音がするので通りがかりの人が覗いてみて、凄惨な光景を目撃する。

La porte était fermée; les garçons l'enfoncèrent et les deux cochons s'enfuirent en

sautant comme des boucs. On ne les a jamais revus.

Alors, tout ce monde étant entré, on aperçut par terre quelques vieux linges, le chapeau du mendiant, quelques os, du sang séché et des restes de chair dans les creux d'une tête de mort.

Ses porcs l'avaient dévoré. (I, p.753)

- 11) Maguelonne Toussaint-Samat, *History of food*, Blackwell, Cambridge, USA, 1992, p.409, アーキタイプ・シンボル研究文庫ベヴァリー・ムーン, 『元型と象徴の事典』, 青土社, 1998, p.144.
- 12) 輪廻転生の因果から, 汚物を食す豚が忌避されるという (『食の思想』, 熊倉功夫・石毛直道編, ドメス出版, 1992, p.96)。付け加えるならば, 仏教徒にとって3つの世俗的存在とは蛇 (嫉妬), 豚 (無意識), 雄鶏 (肉欲) である (『元型と象徴の事典』, 前掲書, p.447)。
- 13) Theodore Zeldin, *Histoire des passions françaises (1848-1945) I*, Payot, 1994, pp.1263-64. ピエール・ギラルール, 『フランス人の昼と夜1852-1879』, 誠文堂新光社, 1984, p.162.
- 14) Antonin Carême, *L'art de la cuisine française au XIXe siècle*, Payot, 1994, p.483.
- 15) 『食と文化の謎』, 前掲書, p.65, 山内昶, 『食の歴史人類学』, 人文書院, 1994, p.192.
- 16) 『大料理事典』, 前掲書, p.160.
- 17) ジョルジュ・ブロン, ジェルメヌ・ブロン, 『フランス料理の歴史』, 三洋出版貿易, 1982, p.293.
- 18) 『食卓の歴史』, 前掲書, p.160.
- 19) 『田園にて』(1882)で子沢山の家庭のつつましい食事風景が語られる。

Tout cela vivait péniblement de soupe, de pommes de terre et de grand air. [...] Les enfants étaient assis, par rang d'âge, devant la table en bois, vernie par cinquante ans d'usage. Le dernier moutard avait à peine la bouche au niveau de la planche. On posait devant eux l'assiette creuse pleine de pain molli dans l'eau où avaient cuit les pommes de terre, un demi-chou et trois oignons; et toute la ligne mangeait jusqu'à plus faim. (I, p.607)

駆け落ちした娘の貧弱な食事をモーパッサンは次のように記している (『幸福』(1884))。

Elle mangeait dans un plat de terre sur une table de bois, assise sur une chaise de paille, une bouillie de choux et de pommes de terre au lard. (I, p.1244)

- 20) 一つ例を挙げれば, 『小さな樽』(1884)で質素儉約を旨とする老婆はいつも家の前でジャガイモを剥く姿が見かけられる。モーパッサンは, プロシア兵の下働きの中にも必ずジャガイモの皮むき作業を含める。
- 21) マリー・ドナルドソン＝エヴァンスもモーパッサンの戦争を素材とする作品で, プロシア軍の士官はサディスティック, 一方兵卒は素朴あるいは愚鈍ですらあると二分している («The decline and fall of Elisabeth Rousset: text and context in Maupassant's *Boule de suif*» in *Australian Journal of French studies*, vol.XVIII no.1, 1981, p.29)。しかし, 彼女は食習慣や体型については何ら触れていない。
- 22) 聖アントワヌ (アントニウス) が奇形の子豚を治す奇跡を行った逸話に基づいて, 彼の図像は豚を伴って描かれることが多い。モーパッサンはその事実を踏まえている。聖アントワヌは豚肉製品店の守護聖人にもなっている。またノルマンディーには, この聖人が砂漠で修行中悪魔に試されて豚を奪われたという言い伝えがある。
- 23) 19世紀において, パリ周辺やノルマンディーには白い種類の豚, ピレネー・アルプス地方にはス

ペイン・コルシカ方面から入ってきた黒豚が飼われていた。

- 24) モーパッサンが当時流行した「*physiognomonie*」に通じ、作中人物の「*traits physiques*」と内面に関わりをもたせていたとする研究書があるが、肥満については言及されていない (Anne Marmot Raim, *La communication non-verbale chez Maupassant*, Nizet, 1986, p.63, p.71)。
- 25) ロジェ・ケンプ, 『ダンディ——ある男たちの美学』, 講談社, 1989, p.178. 当時の男性モードを示す例として, バルザックの『役人の生理学』で洒落者の役人が紹介される際, 彼がコルセットをつけているかどうか賭けようと同僚が冗談を飛ばしたと描かれている。ところで, 肥満への嫌悪感が一般的な感情だったかどうかを論じるのはむずかしい。理想的な体型は時代・社会によって異なり, おまけに個人の嗜好も絡んでくるので単純には決めつけられないからだ。モーパッサンの長編作品でも太った女とやせた女はどちらが魅力的かという論争が繰り返され決着がつかない (『死のごとく強し』)。一般論としては, 19世紀まで, ヨーロッパでは肥満はむしろ, 美食, 成功と富, 鷹揚な人柄を連想させるプラスのイメージを持っていた。ところが, 節度と中庸を旨とする市民的コードの台頭により, ダイエットが広まってゆく (野村雅一, 「ダイエットのヨーロッパ」, 『世界旅行——民族の暮らし2』 (石毛直道編), 日本交通公社, 1982, pp.164-169)。そのうえ, 問題をより複雑化するのには肥満信仰がただ太いだけの肉体を賛美するわけではない点である。近代になって, 男は細いウエストを持つ太った女を求めるようになった。これがコルセットの使用を促したという (バーナード・ルドフスキー, 『みっともない人体』, 鹿島出版会, 1979, p.128.)。つまり, いくら肥満がもてはやされたとしてもめりはりのある身体が前提条件として存在することもある。男性の身体についても同様のことが言えるのではないか。スポーツを愛し, 肉体を鍛えることを怠らなかったモーパッサンの好みとしては, 贅肉にたるんだ男性の肉体を美しいとは思えなかったのかもしれない。作家は太った男を裕福だが醜い人物に好んで設定しているように思われる (『ペラミ』のフォレストイエおよび『モントリオール』のアンデルマットはその典型例)。
- 26) 『みっともない人体』, 前掲書, p.138.
- 27) «la neige est l'image que Maupassant s'est choisi pour symboliser la guerre et l'occupation prussienne.» (Nicole Boulrioux, «Le Paysage de la Guerre de 1870» in *Etudes normandes*, no. 2, 1990, p.115)
- 28) Armand Lanoux, *Maupassant le Bel-Ami*, Grasset et Fasquelle, 1979, p.61. また, 野浪嗣生氏は, モーパッサン自身が普仏戦争に従軍し, プロシア兵に対する敵愾心を胸に焼き付けられたため, この戦争を題材とする作品では思い入れが強すぎて構成が破綻していると指摘する (「モーパッサンのノルマンディを舞台とする短編小説」, 『関大仏文会仏語仏文学』, 第15号, 1985, pp.67-83)。しかし奇妙なことに『脂肪の塊』は短編ではないと考えるためか, 全く言及がなされていない。それとも, プロシア兵への敵愾心だけでは説明できない部分があるからか, あるいは構成が破綻していると断じられないためだろうか。
- 29) 例えば, 1870年7月15日に動員を決めたフランスはその4日後に宣戦布告するが, 将兵たちは休暇を取っていたり帰省していたりでなかなか部隊が揃わないという混乱に陥ったのに対し, プロイセンを中心とするドイツ軍部隊は鉄道網で計画的に動員し, たちまちフランスとの国境に大兵力を集中した。さらに, プロイセン軍は射程10キロという最新の大砲クルップ砲でパリ市内を砲撃し, フランス側の戦意をくじいた。軽工業中心のフランスが重工業重視のドイツに敗退したとも言える (柘植久慶, 『戦場の都・パリ』, 原書房, 1993, p.179, 185, 188.)。
- 30) カール・カウツキー, 『フランス革命時代における階級対立』, 岩波書店, 1954, p.29, 40. 第2帝政は植民帝国の基礎を固めていったが, 軍事国家でありながら軍隊そのものの改革についてはあまり配慮しなかった。その結果が普仏戦争での敗北だという説もある (柴田三千雄他, 『フランス史3』, 山川出版社, 1995, p.109, 前川貞次郎・望田幸男, 『世界の歴史』, 講談社, 1978, p.201.)。
- 31) 木谷勤・望田幸男, 『ドイツ近代史』, ミネルヴァ書房, 1992, p.36.

- 32) *Correspondance I*, Edition établie par Jacques Suffel, Genève, Editio-Service S.A., 1973, p.153.
- 33) *Critiques littéraires*, L'Édition d'art H. Piazza, 1973, pp.83-85, p.150.
- 34) モーパッサンが母親に宛てた書簡を見れば、作家はヴァンセンヌで動員され、雪の降りしきるレ・ザンドリスの森を徒歩で60km敗走した。食糧が満足にない苦境も体験している。
- 35) ルイ・フォレストイエによるモーパッサン全集プレイヤッド版の註 (p.1496) を参照。
- 36) 『フィフィ嬢』には性格・体型の異なる5人の指揮官が現れる。この作品を初め、『狂女』、『二人の友』、『決闘』には士官のみが描かれ、兵卒はたとえ現れたとしても一切細かい描写が省かれている。逆に『聖アントワヌ』、『母親』、『ヴァルター・シュナッフスの冒険』では指揮官の姿は全く見られないか、ほとんど詳細な記述がない。
- 37) ルイ・フォレストイエによるプレイヤッド版の註 (p.1410) および Marie-Claire Banquart, *Boule de suif et autres contes normands*, Garnier, 1971, XLII および Pierre Danger, « La transgression dans l'œuvre de Maupassant » in *Maupassant et l'écriture*, sous la direction de Louis Forestier, Nathan, 1993, p.155. および Mary Donaldson-Evans, *A woman's revenge*, French Forum, Lexington, USA, 1986, p.14 参照。

[付記] 本稿は、文部省科学研究費補助金による研究成果の一部である。